

1 はじめに

本書は実践共同体と正統的周辺参加という2つの鍵概念を示したことで、状況的学習という概念の確立に大きな役割を果たした書籍とされている。この鍵概念の斬新さは、後述する今日の労働問題の意義にもつながる。同時に本書はその難解さにおいても有名である。筆者自身、本書については再読を繰り返し、そのたびに新しい気づきを得ている。

本稿においては、本書が現在の労働問題についてどのような意義を有しているか、わかりやすく解説してほしいという依頼を受けた。難解な本書の今日的意義を、その本質を外さずに少しでも多くの方にお届けできれば幸いである。

2 本書の概要と構成

本書は文化人類学者のジーン・レイヴと社会学習の理論家と実践家であるエティエンヌ・ウエンガーの両名によって著された。本書の議論の出発点は、学校教育で暗黙の前提とされている知識は脱文脈化できるという想定（いわゆる学習転移論）への反駁であった。学習転移論とは、簡潔に言えば脱文脈化された知識を、その知識を持つ人物が教授の方略により、その知識がない人物へと転移できるとする考え方になる（Anderson, Reder and Simon 1996）。学習転移論に対しては本書以前からレイヴが、学習とは社会的実践の文脈に埋め込まれ生起するものであると主張し、学習転移論者との議論を繰り返していた（Lave 1988）。本書ではこのレイヴの主張を実践共同体と正統的周辺参加という2つの鍵概念を新たに示すことで、より解像度を上げて示すことが試みられている。

第1章では実践共同体と正統的周辺参加という2つの鍵概念の概要が示されている。実践共同体とは社会文化的実践が行われ、知識や技能の習得など学習が生起するアリーナ（本場）を意味する。正統的周辺参加とは、実践共同体へ新参者が参加し、その学習を深め

ていくあり様を説明する概念である。ここでいう参加の正統性とは、新参者が実践共同体において一定の権力を行使でき、そこに存在するさまざまな学習資源にアクセスできることを意味する。正統性を認められることで、新参者は参加してすぐに実践共同体に一定の影響を与えることができる。

しかしながら実践共同体により十全的に参加している古参者に比較すると、新参者の権力の行使には限界がある。同時に新参者と古参者には緊張関係があり、場合によっては新参者の権力が増大し、古参者と入れ替わる可能性もある。こうした複雑な権力関係を基盤に正統的周辺参加は構成され、この状況が新参者（周辺参加者）の社会的実践的な学習につながっていく。

第2章では中核的な議論として、正統的周辺参加における学習とは、実践共同体における成員性の変化であり、換言すれば実践共同体においてどういう自分でありたいかを突きつめていくことだ、という説明がなされている。

第3章では徒弟制の事例が示される。第1章と第2章では、正統的周辺参加という学習のあり様は徒弟制を参考にして理論化されたと説明されている。ただし、徒弟制の特徴そのものが正統的周辺参加にあてはまるわけではない。この点は次節で後述したい。

第3章で示される徒弟制の事例は、メキシコのマヤ族の助産師、リベリアの仕立屋、アメリカ海軍の操舵手、アメリカのスーパーの肉屋、そして断酒中のアルコール依存症者たちのコミュニティ（アルコホリックス・アノニマス：AA）という5つである。

ここで注目すべきはAAの事例である。他の4つの事例は伝統的な徒弟制に当てはまる。他方、AAの事例は伝統的な徒弟制そのものとはいえない。むしろ現代社会における、開催が間歇的なゆるやかなコミュニティの形態に近い。ところが、4つの徒弟制とAAの事例からは、共通的に正統的周辺参加を構成する要素が抽出された。この点で正統的周辺参加は、単なる徒弟制の蒸留物ではないことを理解することができ

る。

第4章では第3章の事例を踏まえ、再び正統的周辺参加について語られている。まず正統的周辺参加では、学習の分析は脱中心化されることが示される。脱中心化とは、たとえば知識や熟練が権威的な親方の内部に存在するのではなく、実践共同体という実践のアーリーナそのものに存在し、だからこそ学習が生起するということを意味する。

この章の最後では、実践共同体における学びとは、そこにおけるアイデンティティの形成であり、その形成過程こそが正統的周辺参加であると説明される。

第5章は結論である。これまでの章の議論を踏まえ、状況の学習とは実践共同体における意味を獲得する参加の軌道と説明される。この参加の軌道こそが正統的周辺参加であり、それを通じた知識の獲得はアイデンティティの成長と変容を意味する。

3 本書はなぜ難解なのか

ここまで述べてきた本書の概要と構成を見ても、やはり本書は難解だという印象を覚える読者が多いかもしれない。なぜ本書はかくも難解に感じられるのだろうか。この点について、いくつかの観点から分析してみたい。

(1) 実践共同体の定義の曖昧さ

本書においては正統的周辺参加が難解な概念と指摘されることが多いが、実は正統的周辺参加に関しては、かなり詳細な説明がなされている。むしろ本書の難解さは、実践共同体の定義の曖昧さによるところが大きいかもしれない。本書における実践共同体は、実践の場であるとして所与のものとして記述され、その定義が詳細に示されているわけではない。本書だけで伝統的な徒弟制の共同体と実践共同体の本質的な差を読み解くことは、容易ではない。

Wenger (1998) では保険会社の事例をもとに、隙間実践共同体という公式な職場の隙間に埋め込まれたインフォーマルな実践共同体の詳細が明らかにされる。このように関連する論考を読み解かなければ、実践共同体に関する理解が深まらない点が、本書の難解さを生む一因であるだろう。

(2) 正統的周辺参加と徒弟制の差異

本書では繰り返し正統的周辺参加は徒弟制の蒸留物

ではないと説明される。しかし同時に正統的周辺参加の関係を、新参者、古参者、親方などと表現する。しかも第3章における4つの事例は伝統的な徒弟制によるものである。さらに4事例においては、学習者は同一の実践共同体(徒弟制)に長年所属し、全人格的に変容していくとされる。読者はどうしても正統的周辺参加と伝統的な徒弟制の学びを、類似の性質のものと捉えてしまうかもしれない。

しかし正統的周辺参加は、徒弟制の学びを斬新に再解釈したものである。徒弟制の学びの捉え方として、認知的徒弟制(Collins, Brown and Newman 1989)という親方の弟子に対する優れた指導方法を認知的に抽出した理論もあるが、正統的周辺参加はその乗り越えを目指した理論化といえよう。正統的周辺参加の理論において、もっとも先鋭(斬新)な点は、親方(古参者)の地位は安定的なものではなく、新参者との入れ替えさえ想定されているところにある。この新参者と古参者の緊張関係が、個人と集団のいずれにも偏らない学びを生じさせる。

このような学びの捉え方は、親方が弟子に優れた指導を行うことを前提とした認知的徒弟制とは全く異なる視点であるといえよう。

(3) 前提となっている理論の難解さ

本書では先行研究の関連理論を、読者がある程度理解していることが前提となって書かれている趣がある。この前提によって、本書の難解さが生じているとも考えられる。

最近接発達領域と活動理論

最近接発達領域とは、心理学者のモーツァルトとも呼ばれる著名なレフ・ヴィゴツキーが提唱した概念であり、児童において高次精神機能が発達する際の他者との相互作用の重要性が示されている。本書においては、ユーリア・エンゲストロームを代表的論者とする活動理論(Engeström 1987)を踏まえた最近接発達領域の再解釈が示されている。そこでは最近接発達領域を、学習者個人の発達のための概念と解釈するよりも、集合的な社会レベルにおける新しい活動を生成するための領域と解釈している。つまり最近接発達領域を、個人と集団の架け橋とみなしている。この活動理論ならではの解釈は、本書における社会的実践を前提とした学びの提唱と緊密に結びついている。

ハビトゥス

実践共同体における社会的実践のアイデアは、ピエール・ブルデューのハビトゥスという考えに影響を受けている (Bourdieu 1977)。ハビトゥスにおいて人々の行為は、歴史文化的な実践に埋め込まれている。埋め込みは身体レベルまで深く行われ、人々はそれと自覚のないまま日常的に自らの行為を繰り返していく。このハビトゥスの歴史文化的な実践という概念の理解は、実践共同体における実践の理解に欠かせない。

社会学の前提となる理論

本書の記述は Berger and Luckmann (1966) と Schutz and Luckmann (1973) などの社会学からの影響が大きいと考えられる。Berger and Luckmann (1966) と Schutz and Luckmann (1973) の現象学的社会学によれば、社会には多元的な意味領域が存在し、人々はその意味領域を関連づけ、その意味領域が交差することで共在者との相互主観性が形成され、日常の生活世界が継続していく。こうして人々は意味によるリアリティを構成していくが、そのリアリティがまた知識を再構成するという弁証法的な相互作用が続く。本書では意味としての知識が醸成される社会的世界という言葉が自明のものとして紹介されているが、世界の理解については社会学の理論が参考になるだろう。

アイデンティティ

本書では、学習とは実践に結びついたアイデンティティの成長と発達とみなされている。このアイデンティティと学習の関係性も、本書の難解な部分である。本書ではアイデンティティは「人が自分を理解する仕方であり自分を見る見方、また他者からの見られ方」(邦訳書、62頁)と定義されている。

AAの事例では、新参者が自身の断酒経験のパーソナルストーリーを人々が語ることで新参者の世界に対する見方と振る舞い方も変容し、それによって自身を断酒中のアルコール依存者というアイデンティティに再定義することになる。このアイデンティティ変容は結果的に断酒につながる。つまりここでは、AAにおけるアイデンティティの成長と発達が、断酒という学習につながったことが簡明に示されている。

権力

正統的周辺参加においては脱中心化方略が強調される。すなわち、実践共同体においては中心的参加というものはないとされる。しかし同時に、向心的参加という参加の程度が増大していく軌道は存在する。実践共同体における向心的参加の到達点は、十全的参加と定義される。いったい中心的参加と十全的参加は何が違うのであろうか。

この違いを解説するには、ミシェル・フーコーが示す権力の概念を理解する必要がある (Foucault 1975)。権力とは絶対王政のように中心的に位置するものではない。権力とは一人一人の身体に埋め込まれ、個人が世界に遍在する権力の存在を意識しながら自己規制してしまうような特徴を有する。

この権力のあり様は実践共同体においても同様である。実践共同体においては、親方ないし古参者が絶対的(中心的)な権力を握っているわけではない。新参者も一定の権力を有し、古参者とは不断の緊張関係があり、場合によって古参者と新参者の入れ替わりも発生する。このような入れ替わり(置換)もあるものの、実践共同体には世代をまたがり知識が担保されていくという継続性(連続性)も存在する。この実践共同体の特徴を、本書は連続性と置換の矛盾と表現する。連続性と置換の矛盾という複雑さを示すには、中心的参加という定義は適切ではなく、そのために十全的参加という定義がなされたと考えられる。

4 現在の労働問題から考える意義

以上述べてきた実践共同体と正統的周辺参加は、現在の労働問題にどのような意義を有しているのであろうか。

読者においては実践共同体と正統的周辺参加の学びと、小池(1981, 1991)が指摘する知的熟練論とインフォーマルなOJT(on the job training)の役割に、共通性を見い出した方も多いのではないだろうか。筆者も両者の類似性は高いと考えている。小池によれば、日本企業では同一の内部労働市場(企業)という特定の文脈において、日常的な職場の経験における学びであるインフォーマルなOJTが長期に継続されることにより、知的熟練という高度な技能形成が実現する。

知的熟練に基づく競争力を持った過去の日本企業のあり様は、まさに実践共同体と正統的周辺参加に符合

するのではないだろうか。実践共同体は公式な職場組織ではないと定義されるが、職場を取り巻き多くの隙間実践共同体が存在するとされている。Wenger (1998) は保険会社において、公式な職場とは別に保険担当者等が、たとえばランチや休憩している場で自発的に職務の習熟や改善に取り組む姿を隙間実践共同体として説明している。この事例は公式的な職場とは別に小集団活動が多く存在し、それらにおいて労働者が自発的にさまざまな改善や工夫を行う姿と重なる。こうした小集団活動＝隙間実践共同体においては、上位者（古参者）が絶対的（中心的）な意思決定をするとは限らず、小集団活動の参加者全員が周辺参加者として正統的な一定の権力を有しつつ、活動に貢献していく。このような観点で、実践共同体と正統的周辺参加の学習のあり様は、知的熟練において描かれた日本企業の技能形成とかなりの部分で重なるものと考えられる。

しかし本書においては学習につながらない徒弟制の姿も示されている。たとえば、古参者（親方）が教授的権威主義者として振る舞い、新参者を知識を教え込む存在とみなしてしまうと正統的周辺参加は成立せず、新参者は未熟練労働者のままになってしまう。上意下達の関係性が強い組織で、上位者（古参者）が権威的で教え込む OJT を行えば、正統的周辺参加も知的熟練も生じない。これは日本企業の OJT のあり方への警鐘になろう。

くわえて本書では、越境学習（石山 2018）との関連が目される。越境学習とは、Engeström (1987) が指摘するように専門分化した領域を横断した学びであり、そこには分断されていたはずの領域が接続され水平的に学びが伝播されるという意義がある（石山 2018）。

本書では正統的周辺参加とは実践共同体間の結び目であり、その結合と相互交流を喚起する意義があるという指摘がされている。この意義は、Wenger (1998) では多重成員性という概念で説明される。多重成員性とは複数の実践共同体に同時に周辺参加することで、複数の成員性を獲得することを意味する。周辺参加者の権力は一定程度に制限されているからこそ、他の実践共同体への参加も容易である。多重成員性を有する周辺参加者は、属する複数の実践共同体の相互に対して、他の実践共同体の新鮮な知識を伝播することができる。これこそが、実践共同体と正統的周辺参加に用意されていた越境学習が促進される要素である。

本節の議論をまとめれば、実践共同体と正統的周辺

参加という概念は、従来の日本企業の強みとしての学び（多くの豊穡な隙間実践共同体による知的熟練の実現）と、今後もっと取り入れ促進していくべき学び（越境学習）を実現するための、貴重な示唆に満ちている。本書の価値は、出版当初よりむしろ高まっているかもしれない。

Lave, J. and Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, New York: Cambridge University Press. (=1993, 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』産業図書)

参考文献

- 石山恒貴 (2018) 『越境的学習のメカニズム——実践共同体を往還しキャリア構築するナレッジ・ブローカーの実像』福村出版。
- 小池和男 (1981) 『日本の熟練』有斐閣。
—— (1991) 『仕事の経済学』東洋経済新報社。
- Anderson, John R., Lynne M. Reder and Herbert A. Simon (1996) “Situated Learning and Education,” *Educational Researcher*, Vol. 25, No. 4, pp. 5-11.
- Berger, Peter and Thomas Luckmann (1966) *The Social Construction of Reality*, Garden City, NY: Anchor Books. (=1977, 山口節郎訳『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社)
- Bourdieu, Pierre (1977) *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Collins, Allan, John Seely Brown and Susan E. Newman (1989) “Cognitive Apprenticeship: Teaching the Craft of Reading, Writing, and Mathematics,” in LB. Resnick (eds.) *Knowing, Learning and Instruction: Essays in Honor of Robert Glaser*, Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Engeström, Yrjö (1987) *Learning by Expanding: An Activity-Theoretical Approach to Developmental Research*, Helsinki: Orienta-Konsultit. (=1999, 山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登訳『拡張による学習——活動理論からのアプローチ』新曜社)
- Foucault, Michel (1975) *Surveiller et Punir: Naissance de la Prison*, Paris: Editions Gallimard. (=1977, 田村俊訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社)
- Lave, Jean (1988) *Cognition in Practice: Mind, Mathematics and Culture in Everyday Life*, New York: Cambridge University Press. (=1995, 無藤隆・山下清美・中野茂・中村美代子訳『日常生活の認知行動』新曜社)
- Schutz, Alfred and Thomas Luckmann (1973) *The Structures of the Life-World (Vol. 1)*, Northwestern University Press. (=2015, 那須壽訳『生活世界の構造』筑摩書房)
- Wenger, Etienne (1998) *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*, New York: Cambridge University Press.

いしやま・のぶたか 法政大学大学院政策創造研究科教授。主な論文に“The Impact of the Talent Management Mechanism and Self-perceived Talent Status on Work Engagement: The Case of Japan,” *Asia Pacific Business Review*, Vol. 28, No. 4, pp. 536-554 (2022年)。人的資源管理、組織行動専攻。